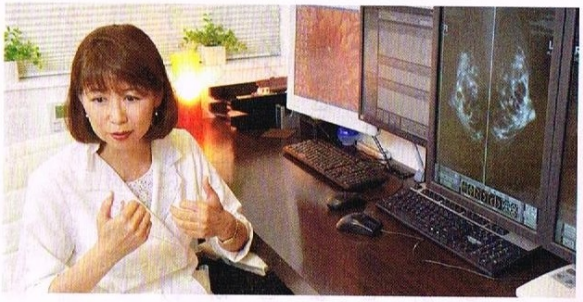
が、乳腺としこりは反射の仕方が違うため、どんなに小さなしこりでも必ず発見することができます。検診では、閉経後あるいは40代を超えた方に対してはマンモグラフィを、それよりも年齢が若い方には超音波を勧めるケースが多くなっています。

いろいろな理由で検診に行くのを躊躇する方もいらっしゃいますが、検診で発見されるということは、症状もない早い段階で治療が始められるということですから、むしろ大変な治療を受けなくても治るチャンスをもらえたということです。ご高齢の方のなかには、この年齢で検診に行ったら笑われるんじゃないかしらとか、検査自体が怖いと思われる方も多いようですが、数年前に比べて女性の放射線技師も随分と増えましたし、何もご心配なさることはないですよ。



また、忙しい日常生活のなかで、なかなかそういったことまで気が回らないという女性たちに対して、私たちは乳がんの早期発見をよびかける「ピンクリボン運動」という活動を2000年から行っています。以前に比べて乳がん自体の認知度は上がってきましたが、まだまだ検診に足を運ぶ方が少ないのが現状です。検診ではご自身で気がつくよりかなり早い段階で病気を見つけることができるので、ぜひ足を運んでいただきたいですね。

もしも乳がんと診断されたら

——仮に乳がんと診断された場合、どのような治療を行うのでしょうか。

0期で発見できた場合、軸になる治療は手術になります。がんを取り除きますが、乳房切除などはせずに部分的な手術ですみます。1期以上の場合は、全身につながる血管やリンパにがん細胞が入っている可能性がゼロではないので全身の治療、つまり女性ホルモンを抑圧する薬や抗がん剤の治療を組み合わせる必要が出てきます。

——抗がん剤治療となると、副作用による負担も大きいのではないでしょうか。

吐き気をストップするなど、抗がん剤の副作用をカバーする薬は昔に比べて随分と増えました。ですが未だに解決できていないのが、副作用による脱毛や、爪の変色や変形などです。抗がん剤が治療に必要とわかってはいても、病気で不安になっているところに外見的な面でもダメージを受けてしまうと、特に女性は回復の妨げになってしまう場合もあります。女性は、いくつになっても綺麗でいたいという気持ちを持っていますから、私たち医師もそういったメンタル面のサポートは非常に重要なところだと考えています。

——具体的にどのようなサポートをされているのでしょうか。

抗がん剤の副作用をお話するなかで、脱毛に対しては、「なるべく治療が始まる前に夢や希望が持てるようなウィッグを準備しましょう」とお伝えしています。以前は、治療中は頭にバンダナを巻いたりして我慢される方が多かったのですが、最近は専門のアドバイザーも増えてきたので、その時に応じたケアの仕方を教わりながら、ウィッグを使う人が増えてきました。いつもはしないような髪型にチャレンジしてみたり、ネイルを楽しんでみたり、なかにはご病気前よりも若々しくされている方もいらっしゃいますよ。私はこれまでいろいろな患者さんを診てきましたが、ご病気であっても楽しむ心を持つことが、回復していく力につながると日々感じています。

取材・文章／井手朋子　写真／木村弘好